

# 教職大学院の学部新卒者を想定した「学校における課題発見実習」の試行の一検討

A Study of Simulation on the Problem Finding Practices at Schools for Novices in Master Programs

稲田佳彦 住野好久 高橋香代 橋ヶ谷佳正  
Yoshihiko Inada Yoshihisa Sumino Kayo Takahashi Yoshimasa Hashigaya

小山朝子 泊直希 近藤勲  
Asako Koyama Naoki Tomari Isao Kondoh

岡山大学大学院教育学研究科  
Graduate School of Education, Okayama University)

<あらまし> 教育実践と理論の往還・融合を重視した教職大学院のカリキュラムの一環として、学部新卒院生向けに「教育実践研究Ⅰ」と「学校における実習(課題発見)」という授業科目を設けた。両科目間の連携・運営を予測し、その有効性を検証するため、同大学院発足3ヶ月前に学部4年次生3名と院生1年次生1名の計4名を実習校へ一人当たり週1回2ヶ月にわたり1日中派遣した。印象も含め実習中の体験などを整理してSNS系ブログに彼らの実習日誌を投稿させた。その内容を分析し検討したところ、所期の結果を得たので報告する。

<キーワード> 教師教育 カリキュラム開発 SNS システム開発 シミュレーション

## 1. まえがき

平成20年4月全国一斉に教職大学院<sup>注1)</sup>19大学が発足した。同大学院の設置趣旨は、多角的視野を持って今日的教育課題解決に向けた実践力とリーダーとしての資質を備えた高度職業人の育成である。設置認可が与えられた19大学の一つである岡山大学は、平成19年度において同申請と並行して「文部科学省 専門職大学院等教育推進プログラム」(以後、教職GPという)を申請し採択<sup>注2)</sup>された。本教職GPの主なねらいは、本教職大学院のカリキュラムを展開・運営する際の手がかり・知見を事前に得るための試行である。

## 2. 研究の枠組み

### 2.1. 研究の意図

本教職大学院のカリキュラムの構成理念は設置趣旨にもとづいて構想されたが、基本理念は多角的な視野を持った、課題発見・分析・解決の実践力の育成であり、理論と実践に精通したリーダー養成である。本研究は、カリキュラムの一環として、図1に示すように学部新卒者を対象とした授業科目「学校に

における実習(課題発見)」(本稿では、以下、「課題発見実習」という)の実施にあたり、院生の学校現場への適応行動と課題発見の意識・意欲の変化・変遷を事前に分析し、その結果を'08年4月からの実施で反映させることを意図した。なお、課題発見実習の知見・成果は趣旨、運営形態が類似している「学校における実習(インターンシップ)」の実施にも応用される。

### 2.2. 課題発見実習の位置づけとモデル学生の派遣意図

本教職大学院の学生定員は20名であるが、県教育委員会の派遣者を含め現職教員が10名程度であり、残り10名は学部新卒者を想定している。本教職大学院のカリキュラムでは、入学生が教育課題を認識あるいは発見し、その分析を通して課題解決に至る実践力を育成できるように、図1のように構成されている。共通科目6領域<sup>注3)</sup>と「教育実践研究」を教職経験の有無に拘わらず必修化させ、多角的な視野の育成と実践的な課題解決に向けた実践力の育成を図る。この「教育実践研究」は「学校における実習」と連動して、実習しながら自己課題や学校課題を発見し、実習の

中でそれを解決していく。10年以上の教職経験者は、審査を経て、「教育実践研究」の一部と「学校における実習」を免除される。10年未満の教職経験者並びに教職未経験の学部新卒者は、「課題発見実習」で参観したこと、体験したこと、省察したことをもとに「教育実践研究Ⅰ（課題発見）」において自己課題を認識するようにしていく。実習校は学校間連携・地域連携など新しい課題に取り組んでいる地域協働学校<sup>注4)</sup>とし、「課題発見実習」は毎週1回1日実習を行なうこととした。その後、明らかになった自己課題を解決するために、8月末からは「課題解決実習」で1ヶ月集中的に実習を行ない、その成果を「教育実

践研究Ⅱ（課題解決）」で省察し、発展させていくカリキュラムになっている。

モデル学生を地域協働学校へ派遣する意図は、このカリキュラムが目指している、学部新卒者が教育課題を発見し、自己課題として認識し課題解決に向けて取り組む過程あるいは実態が想定どおりであるか否かを事前に検証し、その知見・成果を教職大学院における教育研究指導に活用するためである。換言すれば、本教職大学院カリキュラム開発の一環として、学部新卒者に対する「教育実践研究（課題発見）」と「課題発見実習」の往還的連携を前提にした後者の実施シミュレーションと見なすことができる。

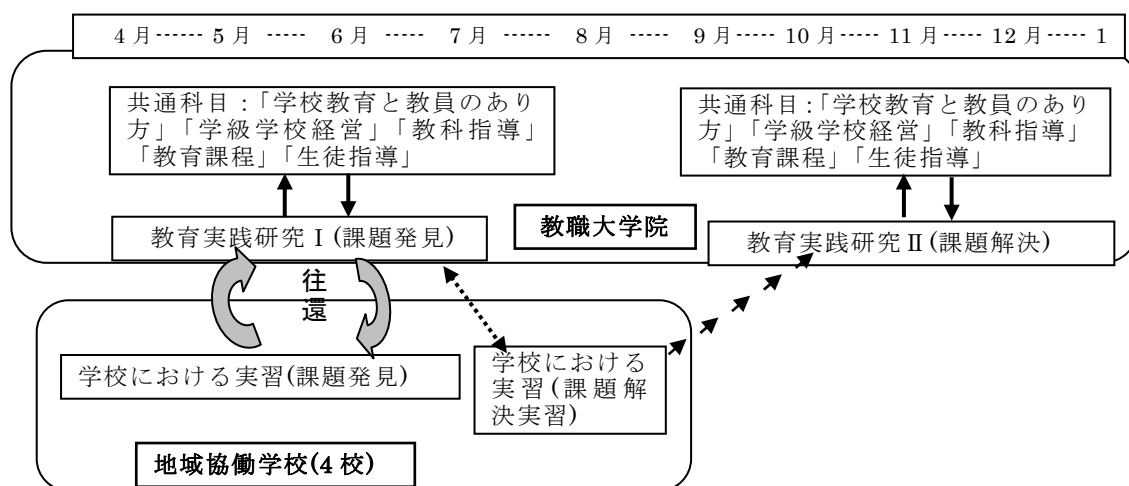


図1 学部新卒者を対象とした本教職大学院の1年次カリキュラムの主要構造

### 3. 実施方法

- ① 協力者  
表1に示すように学部4年次生3名(男1名, 女2名), 院生1年次生1名(女)の計4名である。ここでは、彼らをモデル学生と呼ぶ。
- ② 派遣先  
表2に示すように地域協働学校4校である。内訳は、小学校3校, 中学校1校でいずれもO市立学校である。
- ③ 期間  
表3に示すように'08年1月8日~同2月28日
- ④ 事前準備  
教職大学院設置申請に当たり, 県教育委員会へは従前の連携協力と併せて現職教員の派遣を要請したところ, 10名派遣の確約を得た。併せて, O市教育委員会へ

は'07年10月下旬から11月上旬にかけて学部長, 教職大学院設置検討委員会委員長らが地域協働学校4校を順次まわり教育実習の受け入れとモデル学生の教育実習を受け入れるよう協力を要請し, 了承を得た。

### 4. 情報通信手段による支援

#### 4.1. 必要性

本教職大学院では, この人材育成の目的と学校現場を重視したカリキュラムの展開及び教育研究指導体制を具現化させるため, 複数の指導教員による少人数あるいは対面個別指導を基本指導理念としている。本教職大学院が遠隔教育研究指導システムを必要とする主な理由として, 以下の3点が挙げられる。

- ① 実践からの課題発見・分析・解決, 改善の方策提言と理論の構築を図るため,

実践と省察の蓄積・発展過程が必要に応じて一瞥できること。

- ② 基本指導体制は複数指導教員体制であり個別指導が重視されるが、同時に指導内容・過程が明示化され、それを関係者が即時に共有できること。

表 1 モデル学生のプロフィール

No	学生名	学年等	専攻名	性別
1	学生 A	大学院 1 年生	保健体育	女
2	学生 B	学部 4 年生	教育学	女
3	学生 C	同 上	理科	女
4	学生 D	同 上	英語	男

表 2 地域協働学校の規模（'07 年度現在）

No	学校名	教員数	児童・生徒数
1	P 小学校	22 名	297 名
2	Q 小学校	21 名	401 名
3	R 小学校	25 名	261 名
4	S 中学校	32 名	416 名

#### 4.2. 具備する機能

課題発見から課題解決に至る過程を時系列、且つ、関係領域と統合して把握するためには、各段階における対応・対策の企画立案と試行、処理結果等をその都度、文字・図表・画像等を用いて整理し蓄積する。そして、蓄積された情報を必要に応じ、本人のみならず他者も参照・照合でき、それをもとに議論、あるいはアイデアを提供し合えることが望まれる。逐次蓄積されたものは、学生にとって、デジタルポートフォリオ(digital portfolios)の一つとみなされる。以下に主な機能をまとめる。

- ①「課題発見実習」の体験を記した日記あるいはそれを省察したレポートを特定のコミュニティ、例えば、受講生と授業担当教員で構成される講義題目別コミュニティに投稿すると、構成員（以後、メンバーと言う）が相互にそれを閲覧しコメントなどを投稿できる。  
例えば、mixi<sup>注5)</sup>のようなもの。
- ②「課題発見実習」の最中に実習校にいる受講生と研究室にいる指導教員とが直接

- ③ 2 年次には学校における通常勤務を通して、研究課題の解決あるいは改修・改善の方策・提言に向けた検証を行うため、遠隔教育研究指導体制の構築が不可欠なこと。

表 3 モデル学生の派遣日一覧

No	学生名	派遣月日(曜日) : 平成 20 年	派遣先
1	学生 A	1 月 23 日(水) 同 30 日(水) 2 月 6 日(水) 同 13 日(水) 同 20 日(水) 同 27 日(水)	P 校
2	学生 B	1 月 7 日(月)* 1 月 8 日(火) 同 15 日(火) 同 22 日(火) 同 29 日(火) 2 月 5 日(火) 同 19 日(火) 同 26 日(火) *始業式での挨拶	Q 校
3	学生 C	1 月 10 日(木) 同 17 日(木) 2 月 7 日(木) 同 14 日(木)	S 校
4	学生 D	1 月 10 日(木) 同 17 日(木) 2 月 7 日(木) 同 21 日(木) 同 28 日(木)	R 校

映像・音声を通して質疑応答等ができる他、電子ファイル等の画面共有ができる。例えば、iChat。

- ③受講生が個別に課題別のレポート、模擬授業で使う自作デジタルコンテンツ、報告会でのプレゼンソフトなどをウェブ上で投稿・閲覧できる。例えば、個人ごとの Web サーバ。
- ④指導教員と受講生同士、あるいは教職コラボレーションセンター教職員相互の連絡用に専用メールシステムを設ける。例えば、専用メールサーバ。

#### 4.3. 「こらみゅ」の概要

前項の①の機能については、オープンソースで提供されている「OpenPNE」(詳細は、<http://www.tejimaya.com/openpne.shtml> を参照のこと。)を本教職コラボレーションセンターの技術職員が管理画面を通してカスタマイズし、本教職大学院専用に変更させた。この愛称を「こらみゅ」と呼ぶ。

利用者は管理者側で登録され、利用者間のコミュニケーションは相互の認証と了解が前

提となるので、透明性が保証される。登録者間で必要に応じてコミュニティを形成できる。コミュニティは、教員、学生というメンバーの属性だけでなく、講義題目別あるいは入学年度別にも形成できる。講義題目別コミュニティの場合のメンバーは、その講義の担当教員と受講生である。

#### 4.4. 「こらみゆ」の試用事例

本教職大学院では、学校における日常の活動に生起する多様で複雑な課題に対して、論拠に基づいて検証し適切に対応できる能力の育成をめざす。

学生指導体制としては、各分野の専門家である研究教員と学校現場で長年実践に携わり、豊富な体験と事例ごとのノウハウを持つ実務家教員が連携協力・協働して、教育研究指導に当たる。研究課題としては、学生一人ひとりが意識化し更に探究する課題は、広汎であり千差万別であると予測される。日々の学校現場で生起する現象・事象に関わる多様で複雑な課題解決に向けて、一人の教員または1分野の専門家が指導・助言を行うことには、自ずと限界があると考えられる。このため、必然的に指導体制は、研究教員と実務家教員という組み合わせだけでなく、複数の専門家が連携協力して対応することが求められる。

今回の試行では、図2に示すように様々な専門分野の研究教員と教職コラボレーションセンター教職員が、それぞれの専門性や課題意識に基づいてコメントできる仕組みをつくる。この中では、ある教員のコメントに他の教員が絡んでコメントするなど、一つの記述内容をめぐって複数教員が多角的な視点からコメントし、学生に対する指導を重厚化させることをめざす。

学生一人ひとりには研究課題に応じて組織責任上、研究課題と専門分野等を考慮して、研究指導教員が特定される。しかし、こうし

たシステムを活用することで学生の研究状況を共有しながら、複数教員が協働することが求められる。そのため研究指導教員には、研究課題に応じ、随時、自分以外の専門分野の指導教員を学生に紹介あるいは推薦する、いわゆるコーディネータ役が求められる。

その上、一人の学生に対する教育研究指導を複数の指導教員が担当することに加え、教育研究指導過程を本大学院に参画する教員全員が共有することが、理念の次元に留まらず現実的対応として望まれる。この指導体制は、指導過程の透明化を実現し促進させることであり、従来の大学院における指導体制との差別化を図るためにも不可欠である。

## 5. 星座グラフによる表示

4で述べた集計方法と結果をもとに一瞥性に優れたグラフ化を試みた。グラフ化に当たっては、順序尺度あるいは名義尺度のデータの多次元表現に優れた星座グラフを採用した。但し、5つの項目の件数はいずれも等価とみなし、ベクトルの基本単位は1、最小目盛は0、最大目盛は10、分解能は0.5とした。ベクトル表示に当たっては、表4に示すような計算式を創案し適用した。

以上述べた作図方法によって得られた星座グラフは、図3～図6である。

なお、星座グラフによる本表示方法では、実習内容の項目が増え、且つ、それに対する自己認識、省察が自己変容に直結する内容になれば、ベクトルの終点が座標面の右側領域から左側領域へ移動（円周上の目盛0から10の方向へ）する。また、5つの各項目の件数、つまり換算された評点も含めて項目ごとの評点が一様に増加すると、ベクトルの終点は、目盛が付された円周周辺に近づく。逆に項目ごとの評点差が大きいとベクトルの終点は円周周辺から遠ざかるという特徴がある。

表4 星座グラフのベクトルの計算式

$$(10 \times \text{派遣日ごとの各項目の集計件数}^* / (4 \text{人全てについて全項目の件数の最大値})) \times 0.9$$

\*：集計件数には、実習日誌（日記）に箇条書きされた活動項目のほか、自由記述された内容を3段階に弁別した際の重みが加算されている。つまり、「再認的な内容」「発見的な内容」「自己変容的な内容」とし、それぞれ、0.5、1、2という重みが付けられる。

2008年01月	☆実習1回目☆
09日 12:23	<p>大変遅くなりました・・・ 私の勤怠と(パスワードなど)パソコンの不具合で、日記の更新が1日遅れてしまいました(III-ω-) 申し訳ありません。。</p> <p>昨日、小学校へ実習に行ってきました☆ チャリで30分、とってもいい運動です(・▽・)</p> <p>しかし昨日は8時からあいさつ運動、ギリギリに出てしまったので25分で到着しました。まだ2回目ですが新記録だと思います。もう更新はしたくないです・・・</p> <p>そんなことはどうでもよいとして(*-ω-)♪</p> <p>昨日はあいさつ運動や相談室での子どもとの関わり、授業に入るなどの経験ができました。子ども達はみんなかわいいです♪♪ 「なんで火曜日しかこんのお～～」って言うってくれる子どももいたりして、キュンとしました。</p> <p>しかし、かわいいだけではダメですね。。授業に集中できない子どもをどう集中させるか、どう間違いを改めさせるか、まだまだ考えるべき所はたくさんあります！！</p> <p>頑張ります。(・ω・)ノ</p> <p>しかし、給食なしだったので、子どもが帰ってからの時間はとても長く感じました。</p>

会議なども見せていただき、することがある時間はいいのですが、自分ですることを見つけなければならない時間は、なかなか積極的に行けず、たまに座っているだけになってしまう時間もありました(ω・X・ω・)

勤務が終了し、家に帰ってからは眠気に襲われました(人-ω-)

昨日はデビュー戦ということで、あまり積極的になれなかったのですが・・・

来週は給食もあるのでもっと子ども達と関わること、職員室にいる時は自分から進んで仕事を見つけていくこと、を目標に頑張っていきたいです！！

できれば、教壇にも立ってみたいなあと思っています。来週お話をできたらいいなと思いますε=ε=(o`ω`o)ノ

みなさんはどうするのでしょうか？

コメント	
1番～5番を表示	
2008年01月	職員 A
09日 12:32	<p>パソコンの不具合等もあわせて、おつかれさまでしたーーーー！</p> <p>学生 B</p> <p>先生さん第1号、良いスタートをされたと思います。</p> <p>一日目からあいさつ運動とか、会議に参加したりとか、がんばりましたね！！！！</p> <p>こんな感じの報告だと、こちらも読みやすいし、コメントも書き込みやすいので、いいと思います。</p> <p>最終的にレポートを出してもらうことになるんだと思いますが。。。。</p> <p>報告は、実習先のマックブックで実習の終わりにしてくれてありがとうございますよ^^</p>
2008年01月	職員 A
09日 13:24	<p>初日の報告、拝読。密度の濃い1日になったようですね。「かわいいだけではダメ」のくだりとその対策に目が向けられている点が課題意識の発露と見受けました。</p>
2008年01月	職員 B
09日 17:31	<p>初日お疲れ様です。何も知らないところに飛び込むのは難しいですよ。小学校の先生方はいい方ばかりなのでぜひ、積極的に頑張っ</p>

図2 「こらみゆ」でのモデル学生の実習日誌(左欄)とそれに対する教職員によるメッセージの一事例(右欄)

左欄の記述は、モデル学生 B による地域協働学校 Q における第 1 回目(‘08 年 1 月 8 日)の実習報告事例

右欄の記述は、それに対する指導教員あるいは教職コラボレーションセンター教職員によるコメントである。このような実習報告とコメントの投稿・閲覧が 4 人のモデル学生と教職員との間で 2 月末まで続けられた。

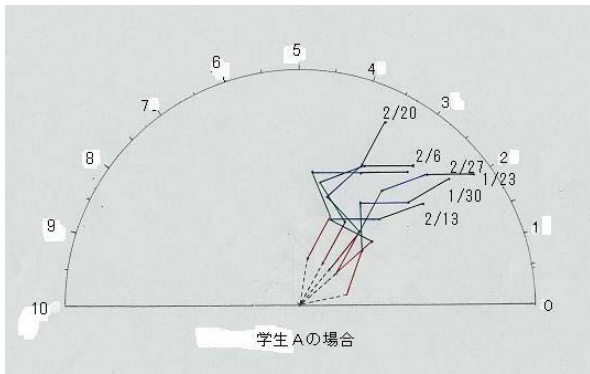


図3 学生A (大学院1年生:女子)

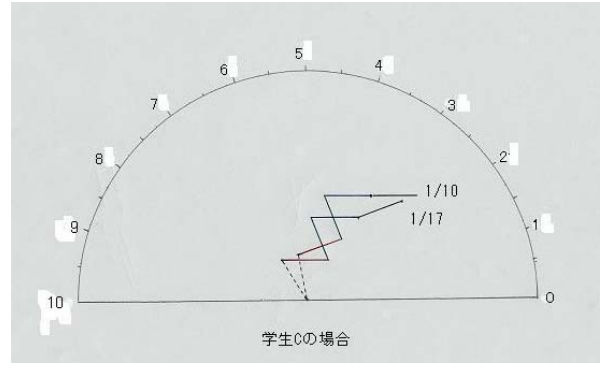


図5 学生C (学部4年生:女子)

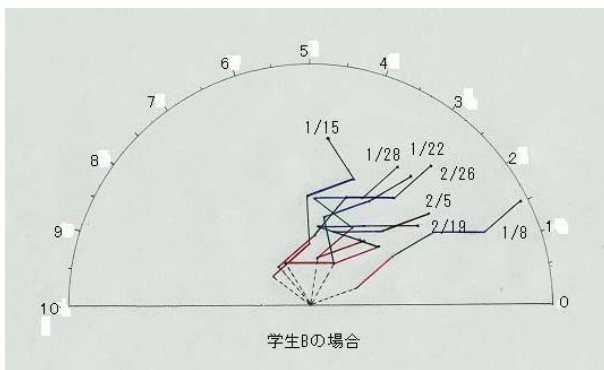


図4 学生B (学部4年生:女子)

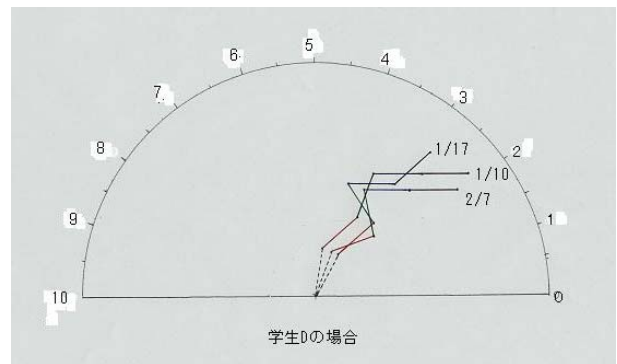
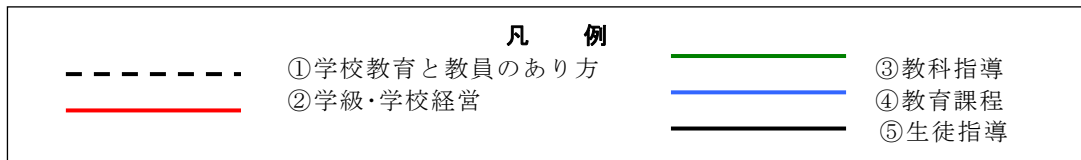


図6 学生D (学部4年生:男子)



## 6. 考察

本研究では、上述のように学部新卒者を対象とする「教育実践研究Ⅰ(課題発見)」と「学校における実習(課題発見実習)」との往還が構想どおり運営できるか否かを検証する手がかりを得ることをめざした。ここでは、「こらみゅ」に投稿されたモデル学生一人ひとりの活動レポートである日誌(日記)の記述内容を時系列的に分析した結果を基に考察する。更に星座グラフを参照して考察する。また、モデル学生による記述内容の真意・意図を確認し傍証とするため、必要に応じて当該モデル学生に対面聴取した。以下にまとめた上で補足説明する。

(1) 新任教員として新任校で学部新卒者が体験する不安と期待が錯綜した心理状態は、モデル学生もほぼ同じである。

派遣先学校の所在地を確認し、当該校の校長あるいは教頭と事前に面識があるとは言え、大半の教職員及び児童・生徒とは面識がないまま、派遣先校で人間関係を新たに形成する必要がある。これについて、モデル学生4人は異口同音に期待と不安を吐露していたが、当該校教職員や児童・生徒と挨拶を交わすことによって、緊張を緩和させ親近感を感じるようになる。ひいては、実習意欲を高め、自信回復を促進させる波及効果を生ずる。

(2) 彼らの実習レポートである日誌(日記)に対する専任予定教員、あるいはコラボセ

ンター教職員からの教示的、激励的なコメントは、彼らの実習への動機付けを強化させる効果を与えている。

モデル学生が実習日誌(日記)を投稿すると、24 時間以内にはそれを閲覧した教職大学院専任予定教員、あるいは教職コラボレーションセンター教職員から、教示的、激励的なコメントが投稿される。

(3) 実習の回数が増え派遣先校教職員から信頼を獲得するにしたがって、次第に任される仕事・業務の内容が増大するなど量的な変化に加え、教務事務処理の手伝いなど、質的变化が見られる。

学習指導面でも当初は、授業参観者の立場であるが、次第に TT(Team-Teaching)の授業運営に直接参画し指導するようになる。また、授業担当教員から学習指導理念や授業実施の事前・事後対応について、指導助言を得るようになっていく。

(4) 校内の各種委員会・部会に陪席することによって、学部段階での教育実習では認識されなかった学校運営に関わる校内組織の存在とそれぞれの機能に注意と関心が向けられるようになる。

学校運営に当たり各種委員会組織が存在し、それらが連携して機能していること、教員は教職経験や教科・学年担当等などが考慮されて校務分掌を担っていること、教員相互のチームワークの重要性などを認識するようになった。そして、教員の使命の重要性と責務の大きさを実感している。

(5) 教育相談室において関わる児童・生徒を通して、個別に子どもの発達・成長と多様性を認識するようになる。

学級・学年集団の中の児童・生徒を観察する認識とは異なり、個として関わる児童・生徒に対しては、一人ひとりの性格・心理状況・学習履歴などを推察し、その上で働きかけの結果を予測して対応する必要性を実感している。つまり、個としての児童・生徒一人ひとりの内面と顕在化された反応を注意深く観察するようになり、以前と異なる反応・変容が見られると、それを喜び充実感と自己効力感を持つようになる。児童・生徒を個として観察するという認識・行動様式が、TT による授業において、個別指導を必要とする児童・生徒を弁別することに応用されている。

(6) 実習内容を共通科目の 5 領域の項目名で分類すると、「教科指導」が体験件数、時間とも突出して多い。

モデル学生自身「教科指導」の授業への関心が高い上に、受け入れ先である学校側の意向・対応が「教科指導」を除いては各委員会・部会への陪席程度に限定されること、背景・経緯の事前の認識が不可欠な「生徒指導」、「教育課程」等へ関わる内容への参画・関与は回避する配慮がされたように見受けられる。勿論、「生徒指導」「教育課程」に関わる案件は、一般に不定期的であり、生起頻度が「教科指導」に比べ低いと推測される。このような実習内容の偏りは、派遣先校教員に準ずる待遇を受けながらも守秘義務のない学生に対して、今後起こりうると考えられる。

(7) 独善的でない積極性に富んだモデル学生は職場への適応が円滑に行われ、本人自身の充足感、自己効力感も高い。逆に周囲から消極的と見なされるモデル学生は不適応を起こす傾向が見られる。

前者の場合は派遣先校で教員だけでなく児童・生徒に歓迎されていると実感し、周囲の人間関係が早期に形成され、親密度が増す傾向が顕著である。張りのある声で受け応えできることが好感度を増すように見受けられる。後者の場合は周囲の人間からの働きかけが次第に乏しくなるとともに、言動を批判的に見られるようになるので、益々不適応が強化されると危惧される。この状況を打開するためには、モデル学生自身が自分自身を対象化でき、より積極的に行動しようという意識をもつこと肝要である。

図 3～6 の星座グラフから容易に弁別できることは、以下の通りである。

5 つの領域のうち、「学級・学校経営」「教育課程」「生徒指導」への関わりが極めて少ないこと。他方、上述のように「教科指導」への関わりの頻度は、突出している。

① 対象要素(ここでは、「学級・学校経営」～「生徒指導」の 5 領域に対する省察の深さを加味した体験内容の件数)は、知識あるいは技能という対象の違いに拘わらず、到達度から判断すると、実習回数の増加、つまり時間経過にしたがって、表示ベクトルの終端は、座標の右領域から左領域へ移動すると仮定される。

② 対象要素(ここでは「学級・学校経営」～「生徒指導」の 5 領域)の達成水準が高低に拘わらず等質化あるいは平衡化すると、表示ベクトルの終端は円周周辺に接近し、不平衡であれば逆に遠ざかると仮定される。



しかし、実際にはモデル学生の場合、4人仮定どおりではない。このような現象が見られる要因としては、以下のようなことが推測される。

- ① 一般に繰り返し練習すれば上達程度が比較的容易に弁別できるという技能習得とは異なり、意識の変容を伴う認知・思考面の変化は、対象要素の測定自体が困難、かつ、同定しにくい。
- ② 上司・同僚から信頼を得ると、任される業務内容が拡大し、併せて件数も増える。但し、信頼を得るまでにある程度時間が掛かるし、信頼を得る過程は直線的でないといと推測される。
- ③ 省察による記述内容は、当初、皮相的かつ印象的な内容に終始する傾向が見られるが、体験を蓄積することによって視野が広がり、次第に深化された内容に変わる。記述内容が変わるにはある程度時間が掛かる他、その変化は直線的でないといと推測される。

## 7. あとがき

本研究を通して得た知見・成果は、平成20年4月に発足する本教職大学院の運営に反映、応用される。それと平行して、本研究の2年目に当たる平成20年度の研究を推進する過程で、本格的に展開される共通科目6領域における「教育実践研究」と「学校における実習」を通して、現実の学部新卒者である本教職大学院生による実習報告並びにそれに対する指導教員のコメント等が「こらみゅ」を介して、収集される予定である。これら収集された実習報告及び課題レポートの内容を精査すること、あるいは直接彼らに対面聴取することによって、更に精緻な知見・結果が改善点と共に得られるであろう。

## 注

- 1) 教育職員養成審議会第一次答申（'97年7月）「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」、同審議会第二次答申（'98年10月）「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について——現職教員の再教育の推進——」、教育職員養成審議会第三次答申（'99年12月）「要請と採用・研修との連携の円滑化について」、

とも一進一退を続け、必ずしも上述の2つの中央教育審議会（'02年12月）「今後の教員免許制度の在り方について」、同審議会（'05年10月）「新しい時代の義務教育を創造する」を受けて、大学教育部会がより高い専門性を育成させる具体策として提案し、文科省令（専門職大学院設置基準及び学位規則の一部を改正）を2007年4月1日に施行。高度専門職業人の育成を目指して、2008年4月に全国の国公立を含め19大学に設置された。標準修学期間は2年、必要習得単位数は45単位以上、実践を重視し少人数授業運営とする。

- 2) 研究題目『真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発——地域協働学校と教職大学院のコラボレーション——』（研究代表者：高橋香代〈学部長〉）
- 3) 「学校教育と教員のあり方」「学級・学校経営」「教科指導」「教育課程」「生徒指導」の5領域と「教育実践研究の方法」の1領域
- 4) 岡山市「市民協働の人づくり条例」にもとづき、市教育委員会が学校と家庭・地域の連携強化をめざしたプロジェクト。学校・保護者・地域住民の役割と責任を明確にして地域教育力を高め、子どもの健全育成を図るプロジェクトの指定校を指す。
- 5) 2004年2月に運用開始したソーシャル・ネットワーキング サービス(SNS)である。企画当初より、「居心地の良いサイト」「身近な人や、趣味・興味が同じ人との交流」をコンセプトに開発が行われ、今では1401万人以上が利用しているといわれている。（2008年3月31日現在）。

## 参考文献

- 岡山大学（平成19年6月）：『岡山大学大学院教育学研究科 教職実践専攻（仮称）設置構想（案）』
- 岡山大学教育学部（平成20年3月）：『平成19年度 文科省 専門職大学院等教育推進プログラム 中間報告書 —— 真に課題解決能力を育てるカリキュラム開発 —— 地域協働学校と教職大学院のコラボレーション —— 』